

尋常
小學

國語讀本

卷三

文部省



尋常
小學
國語讀本
卷三



文
部
省

國立教育研究所
付屬圖書部

モクロク

一	イマハ	一	十四	うらしま太郎	三十九
二	ハヤオキ	二	十五	四方	四十六
三	ヒヨコ	五	十六	私ノ村	四十八
四	うちの子ねこ	十	十七	一口ばなし	五十一
五	お花	十二	十八	をののたうふう	五十四
六	ゆびのな	十四	十九	セミ	五十七
七	かんがへもの	十七	二十	さき舟	六十
八	わらびとり	二十	二十一	水デツバウ	六十五
九	竹の子	二十五	二十二	虫ぼし	七十
十	きやうだい	二十八	二十三	カウモリ	七十三
十一	五いちいさん	三十二	二十四	十五や	七十七
十二	右ト左	三十五	二十五	ふじの山	八十
	まはりつこ	三十七	二十六	はごろも	八十三

一 イマハ

さくら イマハ サクラ ヤナ
 タネ ノ 花ザカリ デス。
 テフテフ ハ 花カラ 花
 へ ヒラヒラト マヒ、ハチ
 ハ セツセト ミツヲア
 ツメテ 舁マス。
 ミチバタ ニハスミレ ヤ

一 イマハ



開き不良

ニ ハヤオキ

ひばり

タンポポガサイテ 弁ル シ、ムギ畠ノ
上ニハ アサハヤク カラヒバリがサ
ヘツツテ 弁マス。

カゼモ アタタカデ、オモテデアソブ
ニハ 一バン ヨイトキデス。

ニ ハヤオキ

こうば

コウバノキテキガナツテ 弁マス。マ
ダウスグラウゴザイマスガ、ケサコソ

からす

ニイサンヨリサキニオキテミヨウト
オモツテ、ソツトネドコヲ出マシタ。
トラアケルト、ムカフノソラガウ
スアカクナツテ 弁マス。カラスガニニ
バナキナガラトンデイキマス。

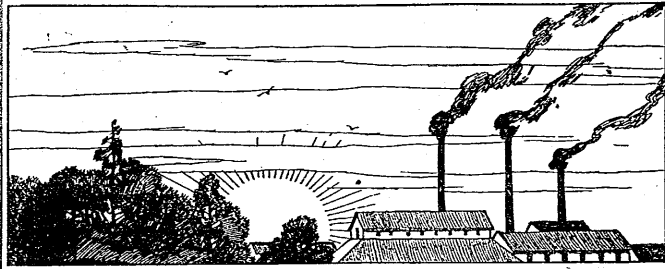
ア、日が出ハジメタ。キレイダ。ニイ
サン、ニイサン。

「オウ、イト 弁ドバタデ、ニイサンノコエ

ニ ハヤオキ

三

えんとつ



ニ
ハヤオキ

ガシマス。

又一シキリキテキガナツ

テ、エントツカラムクムクト

マツクロナケムリガ出マス。

コウバデハモウシゴトガ

ハジマツテキルラシイ。

ハヤクカホヲアラツテ、ニ

イサント一シヨニオサラヒ

ヲシマセウ。

三 ヒヨコ

たまご

二三日マヘカラメンドリガスニツ

キマシタ。ケサオカアサンガタマゴヲ

ハレテオヤリニナリマシタ。メンドリハ

ヘンナコエヲタテテキマシタが見

テキルウチニ、タマゴヲハラノ下

ニダイテシマヒマシタ。

三 ヒヨコ

五

エ ヤ 水 ヲ ヤツテモ、見ムキモ シ
ナイデ、タマゴ ヲ アタタメテ 孵マス。
オカアサン ニ、

ひよこ

「イツ ヒヨコ ガ 出マスカ。」

ト キキマス ト、

二十日

「二十日 バカリ タツ ト 出マス。」

ト オツシヤイマシタ。

アル アサ、オカアサン ガ

おやどり

「ヒヨコ ガ カヘツタ。」

ト オツシヤツタ ノデ、見

ニ イキマス ト、オヤドリ

ノ ムネ ノ トコロ カラ、

ヒヨコ ガ 小サナ アタマ

ヲ 出シテ、ヒヨヒヨ トナ

はね

イテ 孵マシタ。ハネ ノ 下

ニモ ニ三バ 孵ル ヤウ デシタ。



ヒヨコ ガ ナク ト、 オヤドリ ハ オハナ
シデモ スル ヤウ ニ、 ココココ ト イ
ツテ キマシタ。

には

二三日 タツ ト、 オヤドリ ハ ヒヨコ ヲ
ニハ ヘ ツレ出シマシタ。 ヒヨコ ハ ミン
ナ デ 十パ デス。

あし

ヒヨコ ハ ホソイ アシ デ、 チヨコチヨコ
アルキマス。 タベモノ デモ サガス ノ デ

なのは

セウ、 キイロイ クチバシ デ、 トキドキ デ
メン ヲ ツツキマス。

ナノハ ヤ コ米 ヲ ヤル ト、 ヒヨコ
ハ ミンナ ヲツテ キテ タベマス。 オヤド
リ ハ ナンニ モ タベナイデ、 ココ コ
ト イヒ ナガラ、 ソノ ヘン ヲ 見マハリ
マス。

そば

ネコ デモ ソバ ヘ クル ト、 オヤドリ ハ

け

オコツテケヲサカダテマス。
私ハガクカウカラカヘツテ、ヒヨコヲ
見ルノガタノシミデス。

四 うちの子ねこ

うちの子ねこは

かはいいい子ねこ、

くびのこすずを

ちりちりならし、

を い

るも

てれ

すそにからまり、

たもとにすがる。

うちの子ねこは

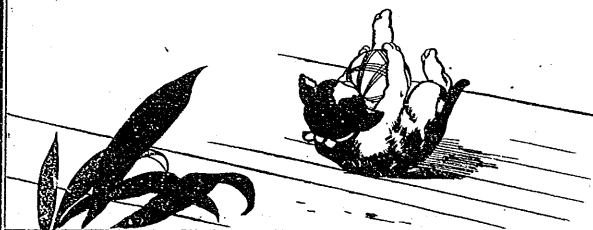
かはいいい子ねこ、

くびのこすずを

ちりちりならし、

まりとざれては

えんからおちる。



五 お花

お花 は がくかう から かへる と、おつ
かひ に いたり、には を はいたり し
て、おかあさんの おてつだひ を します。
あかちゃん が なき出す と、すぐ そば へ
よつて、

「ねんねん ころりよ、

おころりよ。」

ばうやはよい子だ、

ねんねしな。」

とかはいらしい こゑで、子もりうたを
うたひます。それでも、まだ あかちゃんが
なく とき には、

「おかあさん、あかちゃん
におちちを のま
せて ちやうだい。」



かういつて、だつこをして おかあさん
のところへつれていきます。

お花はことし九つです。

六ゆびのな

ゆふはんがすんだあとで、おぢいさん
が二郎にたづねました。

「おまへはてのゆびのなをし
つてゐますか。」

ふゆ 二 る ほ

しつてゐます。一ばんふといのがお
やゆびで、一ばんほそいのがこゆ
びです。

「それから。」

「それから、一ばんながいのが中ゆ
びで、中ゆびとおやゆびのあひだ
にあるのが人さしゆび、中ゆびと
こゆびのあひだにあるのがく

すりゆびです。

「さうです。それではあしのゆびのなをしつてゐますか。」

「おなじことでせう。」

「まあ、いつてごらん。」

「おやゆび、人さしゆび。」

わ

おぢいさんはわらひながら、

「二郎、おまへはそのゆびで人を

さしますか。あしのゆびは、おやゆ

びとこゆびのほかにはながな

いのです。」

とをしへてやりました。

七 かんがへもの

「このはこの中に、おもしろい人が

ゐます。あててごらんなさい。」

「そのはこをかしてください。」

「はい。」

「ふつてもようございますか。」

「はい。」

「たいそうかるうございますね。この人はどんないろのきものをきてゐますか。」

「あかいきものをきてゐます。」

「それではをんなでせう。」

「いいえ。」

「それではをとこの子ですか。」

「いいえ。としよりです。」

「どうもこまりました。どんなかほをしてゐますか。」

「かほちゆうひげだらけです。」

「それではてもあしもないでせう。」

「はい。」

「わかりました。だるまさんです。」

八 わらびとり

小 二郎は正一とうらの山へわ
らびをとりにいきました。よけいに
とつたはうがかちだといつて、二
人はまつやつじのあひだをあ
ちらこちらへくぐつてとりました。太
くてやはらかなわらびがたくさんは
えてゐました。

む 上



二人がむちゆうになつ
てとつてゐますと、下
のはうからかさかさい
はせてかけ上つてくるも
のがあります。
二人がびつくりして見
てゐますと、それ
は小二郎のうち

ぬ いぬ でした。犬は はな を くんくん
いはせ、を を やたらに ふつて、小二郎
の そば へ よつて きました。それ から
その へん を むやみに かけまはりました。
又 とりはじめて、二人 は たくさん とつ
て から くらべて みました。どちら も た
いてい おなじ くらゐ で、かちまけは あ

ぬ み め

りません でした。

その とき 正一 の おぢいさん が、たき
ぎを うま に つけて そこ へ きまし
た。二人 は よろこんで、おぢいさん に つ
いて かへりました。

小二郎 が うち へ かへつて みます と、
犬 は もう とつくに かへつて ゐて、か
けて きて とびつきました。

あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね	の	は	ひ	ふ	へ	ほ	ま	み	む	め	も	や	い	ゆ	え	よ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

が	ぎ	ぐ	げ	ご	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	だ	ぢ	づ	で	ど	ば	び	ぶ	べ	ぼ	ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

雨

ら	り	る	れ	ろ	わ	る	う	ゑ	を	ん
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

九 竹の子

この 二三日の 雨で、竹の子が こんに
 なに 出ました。むぐらもち でも とほつた
 やうに、土が ところどころ もち上つて
 えます。そこ から 竹の子が 出る の

です。

この あひだ かきねの そばへ 出たの
は、もう 私の せいより 高く なりま
した。かう のびて は とても たべられま
せん。

石がき の 下へ 出た の は かは が
おちはじめ、竹 になりかかつて るます。
あれ は いまに さを竹 に ても なる の

高 石

でせう。

又 あそこ ここに わらを むすびつけ
て ある の は、ほり
とらない しるしで、の
ばして おや竹 に す
るの だ きう
です。むかふの
方に、二本 な



らんで るる ほそい 竹の子は、いまに 竹
になつたら、おちいさんに、あれで 竹
うまを こしらへて いただく つもり
です。

十 きやうだい

ゆふべの雨で、くさや木の
みどり いろ ます なつの あさ、
つつみ かかへて がくかうへ

つれだち いそぐ あね おとと。

足

足 すべらせて こけかかる

おととを かばふ あねの うで。

かばふ はずみに あねは また

足だ の はなを ふつつりと。

「ねえさん これを あげます。」と、

こしにはさんだ手ぬぐひの
はしひきさいてさし出せば、
正さんこれはありがたう。」

あねは手ばやくををたてて、
小川の水で手をあらひ、
「さ、いきませう。」ときやうだい
はがくかうさしていそぎゆく。

十一 五一ぢいさん

村はづれに水車やがあります。村の
人は五一車とよんでゐます。五一ぢ
いさんがその水車やのばんをして
ゐるからです。

五一ぢいさんはおもしろいぢいさんで
す。『からすのなかない日はあつて
も、五一ぢいさんがうたはない日はな

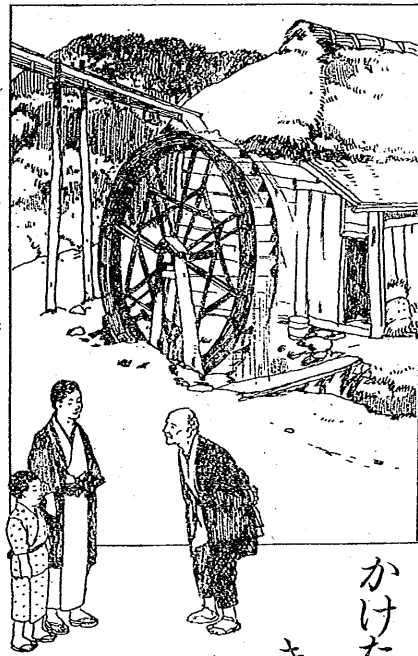
長

い。と村の人からいはれるほど、い
つもきげんよくうたをうたふちい
さんです。
長いはんてんをきて、みじかいももひ
きをはいて、こぬかだらけになつては
たらくちいさんです。
ざぶざぶおちる水のおと、とんとん
ひびくきねのおと、そのにぎやかな

中から、

いごと なされよ、

きりきりしやんと、



かけたたすきの

きれるほど。

五いさん

んのう

たふこゑ

道

が きこえます。

いつか うちの おとうさんが 道で、

「いつも おたつしやなこと」で。

とおつしやつたら、五一ぢいさんは

「もう すつかり よわりまして。」

といつて、大きな 手で あたまを な
でました。

五一ぢいさんは ことし 六十九 だ さう

右 左

です。

十二 右 ト 左

ゴハン ヲ タベル トキ ニ、ハシ ヲ モ

ツ 方 ノ 手 ハ 右 デ、チヤワン ヲ モ

ツ 方 ノ 手 ハ 左 デス。

足 ニ モ 右 左 ガ アリ、目 ニ モ 耳 ニ

モ 右 左 ガ アリマス。キモノ ノ ソデ ニ

モ、タビ ニ モ、手 ブ クロ ニ モ、クツ ニ モ

持

右左 ガ アリマス。
タイサウ ノ トキ アルキ出ス ノ ハ 左
ノ 足 デ、オケイコ
ノ トキ アゲル ノ
ハ 右 ノ 手 デス。
又 オモイ モノ ヲ
右 ノ 手 ニ 持ツ トキ ニハ、カラダ ヲ
左 ノ 方 ヘ マゲ、左 ノ 手 ニ オモ

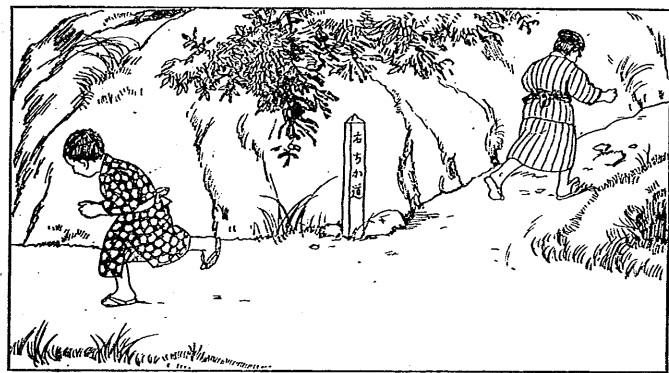


通

イ モノ ヲ 持ツ トキ ニハ、カラダ ヲ
右 ノ 方 ヘ マゲマス。
ソレ カラ、道 ヲ アルク トキ ニハ、左
ガ ハ ヲ 通ル ノ ガ ヨイ コト ニ ナツテ
キマス。

十三 まはりつこ

小三郎「又 わかれ道 の ところ へ きました。
まはりつこ を して みませう か。」



正一「して みませう。ぼくは右のちか道の方をいつてみます。」
 小三郎「それではぼくは左の本道を通ります。」
 二人はかけ足でま

はりつこをしました。ちか道の方は道がこはれてゐたり、石が出てゐたりしました。それでとほい本道をまはった小三郎の方が、正一よりもかへつてさきにつきました。

十四 うらしま太郎

むかし うらしま太郎といふ人がありました。

海

ある日はまを通ると、子どもが大ぜいでかめをつかまへて、おもちやにしてゐます。うらしまはかはいさうにおもつて、子どもからそのかめをかつて海へはなしてやりま



舟

した。

それから二三日たつて、うらしまが舟にのつてつりをしてゐますと、大きなかめが出てきて、

「うらしまさん、このあひだはありがとうございました。そのおれいにりゆうぐうへつれていつて上げませう。私のせ中へおのりなさい。」

上

毎



といひました。うらしまがよ
ろこんでかめにのると、か
めはだんだん海の中へ
はいつていつて、まもなくりゆ
うぐうへつきました。
りゆうぐうのおとひめはう
らしまのきたのをよろ
こんで、毎日いろいろなごち



そうをしたり、さまさま
なあそびをして見せ
たりしました。
うらしまはおも
しろがつて、うち
へかへるのも
わすれてゐまし
たが、そのう

箱玉

ちにかへりたくなつて、おとひめに
「いろいろおせわになりました。あまり
長くなりますから、もうおいとまに
いたしませう。」
と、いひました。おとひめは
「それはまことにおなごりをしいこと
で、ございます。それではこの玉手箱
を上げます。どんなことがあつても、

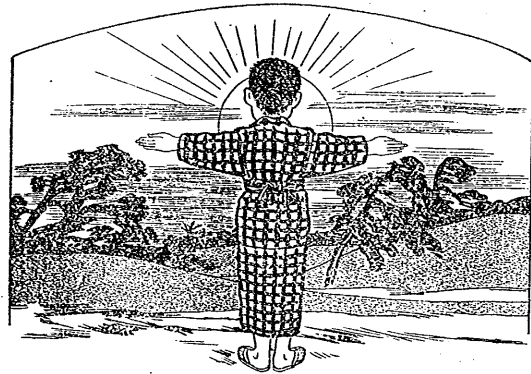
母父

ふたをおあけなさいますな。
と、いつて、きれいな箱をわたしました。
うらしまは玉手箱をもらつて、又か
めのせ中につて、海の上へ出
てきました。
うちへかへつてみると、おどろきました。
父も母もしんでしまつて、うちもな
くなつてゐて、村のやうすもすつかり

かはつてゐます。しつてゐるものは一人もありません。かなしくてかなしくてたまりませんから、おとひめのいつたこともわすれて、玉手箱をあけました。あけると、箱の中から白いけむりがぱつと出て、うらしまはたちまち白がのおぢいさんになつてしまひました。

十五 四方

北 南 西 東



トイヒマス。

日ノ出ル方が東デ、日ノハイル方が西デス。東へムイテリヤウ手ヲヒロゲルト、右ノ手ノ方が南デ、左ノ手ノ方が北デス。東西南北ヲ四方

學校

十六 私ノ村

學校ノ北ニ小高いヲカガアリマ
ス。ヲカノ上ニ天ジンサマノオ
ミヤガアリマス。ソコへ上ルト、私
ノ村ハ一目ニ見エマス。
村ノ中デ一バン目ダツノハ私
ドモノ學校デス。大キナ家が三ム
ネ、[「]コノ字ナリニタツテヰマス。學校

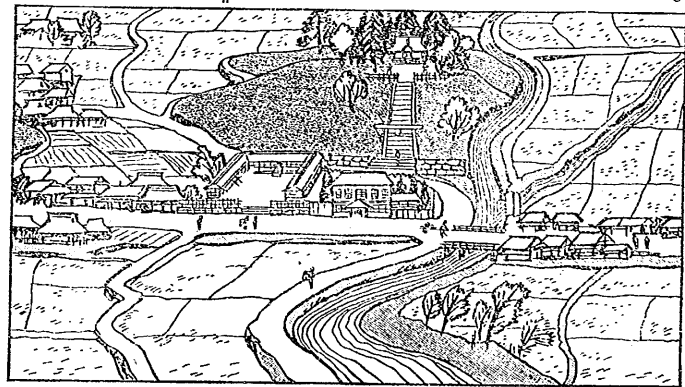
字 家

新 | 新

ノ東ドナリニニカイヅクリノヤクバ
ガアリマス。
ヤクバノヨコデ、川ガニツオチア
ツテ、マガリクネツテ、南ノ方ヘナ
ガレテイキマス。
キヨネンデキ上ツタ新道ハ、村ヲ東
カラ西ヘ、マツスグニツキヌイテヰマ
ス。新道ノリヤウガハニハ、新シイ家

今

ガセハケン デキマシタ。
 ソノ 中 ニハ、 ニウリヤ
 モ アリマス。 今 ソノ
 ミセノ マヘニ ニ車
 ガトマリマシタ。 車ヲ
 ヒイテ キタ 人ガ ベ
 ンタウ デモ タベル
 ノ
 デセウ。



青

寺

星

ツイ コノ アヒダ ウエタ 田ガ、モウ ア
 ンナニ 青ク ナリマシタ。
 ドコ カ ヲカノ 下デ、 ニハトリガ ナ
 キマス。 モウ オヒル ニ ナツタ ノ デセ
 ウ。 オ寺 ノ カネ モ ナリ出シマシタ。

十七 一口ばなし

一 雨の あな

子ども が そら一めんの 星 を 見て、

光

「ああ わかつた。あの 光る ところが 雨
の ふる あな だ。」

二 星とり

何

「おい、長い さを を ふりまはして、何 を
してゐる の だ。」
星 を 二つ 三
つ はたきおとさ
う として る



兄 弟

る の だ。」

ばかな こと を いふ。そんな ところ で
とどく もの か。やね へ 上つて はたけ。」

三 星のかず

ある ばん、弟 が には へ 出て、一つ
二つ どの かぞへて りました。兄 が
「おまへ、何 を かぞへて ゐる の だ。」
と たづねます と、

弟^一星をかぞへてゐます。

兄「こんなくらいばんにかぞへないで、ひるかぞへるがよい。」

十八をののたうふう

むかしをののたうふうといふ人がありました。わかいとき字をならひました。が、うまく書けませんので、こまつてゐました。

書

池

虫

あるとき、雨のふる日に、たうふうがにはへ出て、池のはたを通ります。と、しだれやなぎのえだへかへるがとびつかうとしてゐます。かへるはやなぎのつゆを虫とでもおもつたのでせう、とんではおち、とんではおち、何べんも何べんもとびつかうとします。だんだん高くとべ

る やうになつて、とうとう やなぎに
とびつきまし
た。たうふう
はこれを
見て、この
かへるのや
うに、こんきがよければ、何ごとでも
きない こと はない と さとりました。



名

それからは一しやうけんめいになつて
毎日字をならひました。ずんずん手が
上つて、のちには名高い書手となり
ました。

十九 セミ

前

ニハノモモノ木ノネモトカラ、カ
ラヲキタセミガハヒ上ツテキマス。
チヤウド私ノ目ノ前デトマツテ、

色

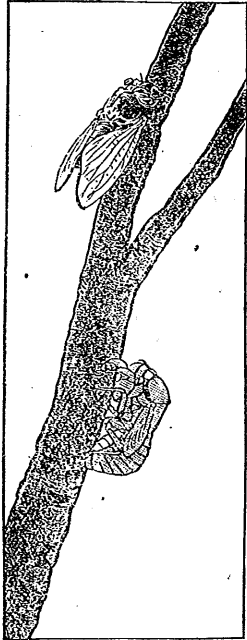
來

カラヲヌギハジメマシタ。
 マモナクヌイデシマヒマシタ。アブラゼミ
 デス。色がウスクテ、ヌレテキルヤウ
 ニ見エマス。見テキルウチニ、チヂン
 デキタハネモダンダンノビテ、色モ
 シダイニコクナツテキマシタ。
 スコシタツテカラ又來テ見マスト、
 モウリツパニセミニナツテキマス。

行

コノ大キナモノガ、ヨクアノカラノ
 中ニハイツテキタモノダトオモ
 ヒマシタ。

ツカマヘヨウトシテ手ヲ出シマスト、
 ジイツトナイトトンデ行キマシタ。



今ニハノ
 木ニセミ
 ガウルサイ

ホド ナイテ 舁マス。アノ セミ モ コノ
中 ニ 舁ル ノ デセウ。

二十 ささ舟

風
今日 三郎
日の 光 が やはらかに さして、小川の
水 は きれいに すきとほつて ゐます。風
が しづかに ふいて 来て、きしの ささ
が さらに おと を たてて ゐます。
二 郎 三郎 さん、又 今日 も 舟 を なが

男 人

して あそびませう。

三郎 又 は しりくら を させませう。五郎
さん も なかま に おはいり なさい。
みよ子 私 は かちまけ を 見る 人 に な
りませう。

男の子 三人 は ささ の は を とつて、
舟 を こしらへました。

みよ子 は ささ の 小えだ を 手 にも

つて、土ばしの上にな
あました。

みよ子「さあ、私がこゑを
かけましたら、みなさん一
しよに舟を出すの
ですよ。一、二、三。」
三人は一しよに舟を
出しました。舟は風に



ゆられながら、土ばしの
方へながれて行きます。
三人は舟とならんで、
川のふちをかけて行
きます。草のはにと
まつてゐたてふてふが
おどろいてとびたちまし
た。



近

みよ子「あら、てふてふが五郎さんの舟にとまりました。」

舟はだんだん土ばしへ近くなりま

す。
五郎「ほうら、もうちきしょうぶだ。」

みよ子はさつとささの小えだを上げて、

「はながち、五郎さんの舟。」

二 郎「五郎さんばんざい。」

三 郎「五郎さんばんざい。」

みよ子「五郎さんの舟には、てふてふの
せんだうさんがのつたから、かつた
のでせう。もう一どやつてごらん
なさい。」

二十一 水デツパウ

私ノウチへキノフヲケヤガ來テ、

手ヲケヤタラヒノタガヲカケカヘ
マシタ。アトヘ竹ノキレヲノコシ
テ行キマシタガ、ソノ中ニフシガ
一ツアツテ、水デツバウニナリサウナ
ノガアリマシタ。

私ハソレヲヒロツテ、フシノマン
中ニキリデ小サナアナヲアケマ
シタ。ソレカラホソイ竹ヲエニシ

テ、ソノサキニキレヲマキツケテ
センヲコシラヘマシタ。

池ノ水デタメシテミルト、ウマク
出来テ、井テ、高ク上ゲルト、ヤネノ
上マデトドキマス。

ウレシクテタマリマセンノデ、ニハニ水
ヲウツタリ、ウエホニ水ヲカケタリ
シマシタ。



ソノウチ
ニ水が
出ナクナ
ツタノデ

センヲヌイテ見ルト、キレガトレ
テキマシタ。又マキナホシテ、コンドハ
水デッパウヲジヨウロノカハリニシ
ヨウトオモツテ、フシニ小サナアナ

ヲタクサンアケマシタ。サウシテセンヲ
ヒキマシタガ、水ガウマクハイリマセ
ン。コマツテニイサンニ見テモラヒマ
シタラ、

「コンナニアナヲタクサンアケテハ
ダメダ。ソノウチニ、ニイサンガコ
シラヘテヤラウ。」

トイフコトデシタ。

二十二 虫ぼし

着物

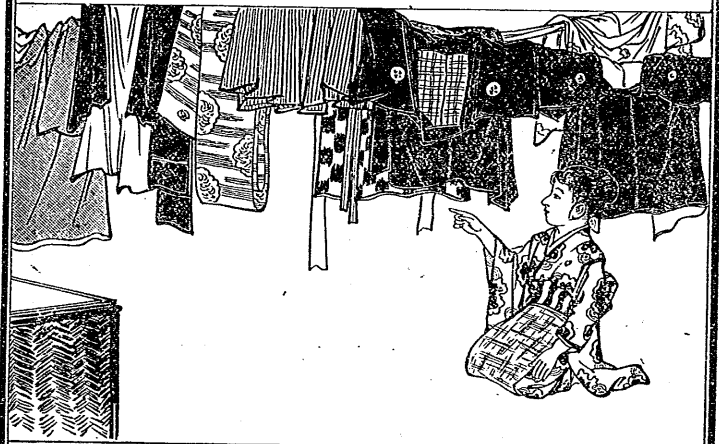
今日はうちの虫ぼしです。たんすや
つづらから着物を出して、風通しの
よいところにかけてあります。
この黒いもめんのもんつきは私の
です。そのとなりの五つもんのお
りとしまのはかまはおとうさんの
です。

廣

赤

そちらのはばの廣い光るおびは
ねえさんので、はばのせまい黒い
はおばあさんのです。おばあさん
あれをしめて、よくお寺まゐりに
らつしやいます。
それから、あの赤いじゆばんはねえ
さんので、ねずみ色のもんつきは
おあさんのです。

祭



こちらの かすりの
 つつそでは 太郎の
 あはせで、その とな
 りの めりんすの あ
 はせは 私の です。
 私どもは あれを
 着て、をばさんの 村
 の お祭によばれて

鳥

行くのです。

二十三 カウモリ

ムカシ 鳥 ト ケダモノ ガ ケンクワ ヲ
 シタ コトガ アリマス。 ソノ トキ カウ
 モリ ハ
 私 ハ 鳥 デモ ケダモノ デモ ナイ
 カラ。
 ト イツテ、 ドチラ ヘ モ ツキマセン デ

中

シタ。

ソノ 中 ニ ケダモノ ガ カチ サウ ニ
ナツタ ノデ、

私 ハ カラダ ガ ネズミ ニ ニテ 斗
ル カラ、 ケダモノ ダ。

ト イツテ、 ケダモノ ノ ミカタ ニ ナリ
マシタ。

スコシ タツテ、 コンド ハ 鳥 ガ カチ サ

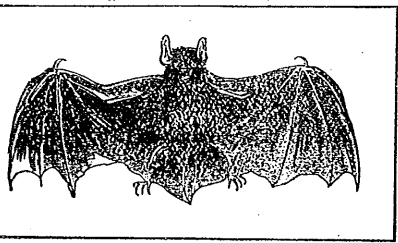
羽

時

ウ ニ ナリマシタ。 スルト カウモリ ハ
私 ハ 羽 ガ アル カラ、 鳥 ダ。

ト イツテ、 鳥 ノ 方 ニ ツキマシタ。

イツ マデ タツテ モ ショウブ
ガ ツカナイ ノデ、 中ナホリ
ヲ シマシタ。 ソノ 時 カウモリ
ガ ケダモノ ノ 方 ヘ 行キ
マス ト、



「オ前ハ鳥デハナイカ。」

トイツテ、ナカマヘ入レテクレマセン。
又鳥ノ方ヘ行キマス ト

「オ前ハケダモノドラウ。」

トイツテ、アヒテニシマセン。

ソコデカウモリハシカタナシニ、ヒ
ルハ木ノウロヤアナノ中ニ
カクレテ、井テ、クラクナツテカラ
空

空

ヲトビマハルヤウニナツタトイヒ
マス。

二十四 十五や

十五やの月がざしきのまん中ま
でさしてゐます。

夕はんがすむと、うちのものはみ
んなえんがはへ出ました。えんがはに
は、夕方からいもやだんごをつく

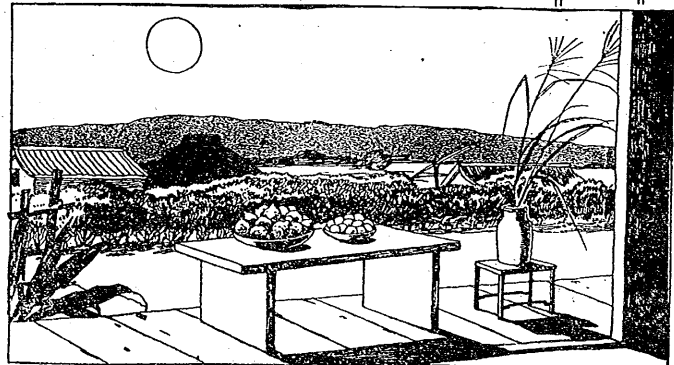
夕

雲 上 吹

ゑにのせて、お月さまにそなへてあ
ります。今日私が川の土手からと
つて来たすすきも、花いけにさして
そなへてあります。
空は水のやうにすみきつて、雲一
つありません。
だれか川上の方で、さきほどから
ふえを吹いてゐます。

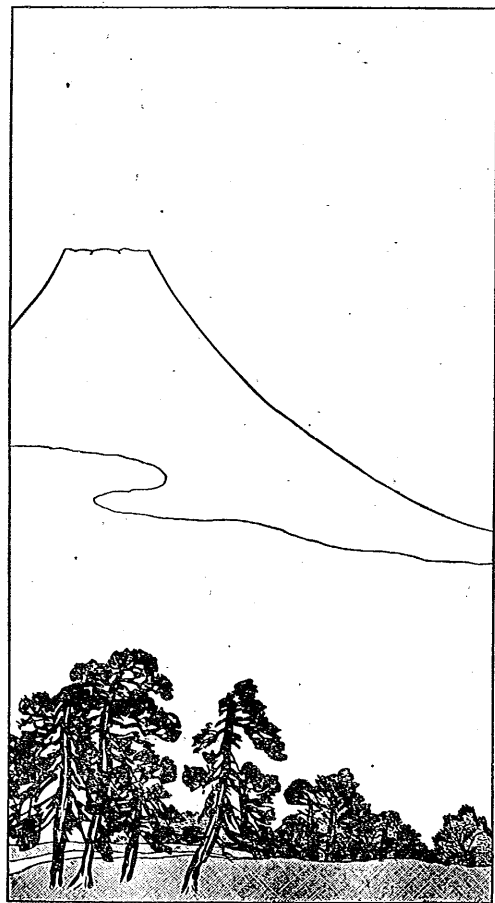
来

時時すずしい風が吹
いて来ると、おもひ出し
たやうにくつわ虫が
なきます。おばあさんが
「ふみ子もこんやはき
つとあちらでこの月
を見てゐませう。」
と、ひとりごとのやうに



遠
おつしやいました。ねえさんは遠いところへおよめに行つていらつしやるのです。

二十五 ふじの山
あたまを雲の上に出し、
四方の山を見おろして、
かみなりさまを下にきく、
ふじは日本一の山。



青空 高く そびえたち、
からだにゆきの着物 着て、

かすみのすそを遠くひく、

ふじは日本一の山。

二十六 はごろも

むかし一人のれふしが

「今日はまあ、何といふよいお天
きだらう。」

といひながら、みほの松原を通り
ました。

松原

日はよくてつてゐて、ふじの山は
いつもよりなほきれいに見えました。
風はしづかで、なみもおとをた
てません。おきの方はかすんで、空と
水が一つになつて見えます。
あまりけしきがよいので、れふしが
ぼんやりと海をながめてゐました。ど
こからかよいにほひがして來ま

美

すので、見上げますと、松の木に美しい物が、かかつてゐました。そばへよつて見ますと、見たこともないきれいな着物でした。

「これはよい物がある。ひろつて家のたからにしよう。」

といつて、持つてかへらうとしますと、見たこともない美しい女が來まし

女

た。

「それは私の着物で、ございます。」

「いや、これは私が今ここでひろつたのです。持つてかへつて家のたからにします。」

「いや、それは天人のはごろもといふ物で、人げんにはよいものではないです。」

國

「天人のはごろもなら、なほさらかへすことは出来ません。國のたからにいたします。」

「それがなくては、天へかへることが出来ません。どうぞおかへし下さいませ。」

れふしはかへしませんでした。天人はしをしをと、して、なみだにうるむ目で

下

申

空を見上げました。

れふしはきのどくになりまして、

「あまりおかはいさうですから、おかへし申します。そのがはりに天人のまひといふものをお見せ下さいませ。」

「おかげで天へかへることが出来ます。おれいにまひをまひませう。」

上

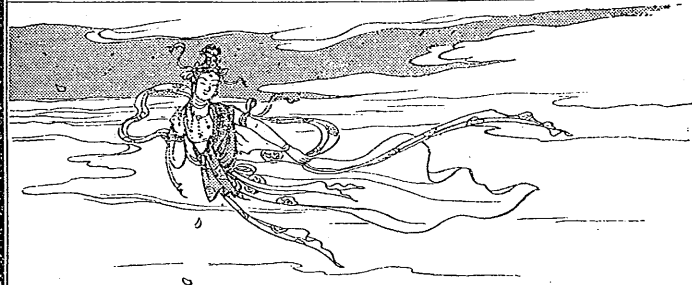
その はごろも を
おかへし 下さいま
せ。
「いやいや、おかへし申
したら、まはずに 空
へ お上り になりま
せう。
「いや、天人 は うそ



二十六 はごろも

八十八

袖



を いひません。
「ああ、はづかしい こと を
申しました。
れふしが はごろも を か
へしますと、天人 は そ
れを 着て、まひはじめま
した。はごろもの 袖 は
かるく 風 に まひ、はご

二十六 はごろも

八十九

K130,8-3-3

二十六はごろも

九十

ろもの色は日の光にかがや
きました。れふしが見とれて
ゐますと、天人はまひな
から松原の上をだんだん
高く上つて、ふじの山より
も高い大空のかすみの中
へはいつて行きました。

をはり

大正六年十二月五日翻刻印刷
大正七年十一月五日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文部省

大正七年十月三日
文部省檢査濟

翻刻發行
兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者

石川正作

印刷所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

發賣所

東京市麴町區飯田町一丁目三番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

尋常小學國語讀本卷三

定價金 八錢
臨時定價金 拾錢

肆